

1970年代以降の日本社会（2）

—近代の第2ステージ・もっと²の時代—

西 脇 和 彦

1. はじめに

小論「1970年代以降の日本社会—ポストモダン or 近代の第2ステージ—」において、筆者は、1970年代以降の日本社会を社会学的に考察した⁽¹⁾。マクロ的にアプローチすると、サービス（化）社会・情報（化）社会という特徴があり、それらをメゾからミクロ的に、パーソナル化が通底した諸事象（たとえばカラー戦略、イメージ戦略、警備保障）でケーススタディした。この時代の特徴は、付加価値のさらなる更新・高度化にあり、絶えざるプラスアルファの追求が不可欠となることである。究極的には個々人の個別ニーズに対応したサービスが理想とされ、消費者にとっては至福をもたらすことになる。高度消費社会ともいわれる所以である。すなわち個人化が物的にはもちろんのこと、サービスでも情報でも社会全体に進行し、個人は細分化されながらもその自由度はたかまる時代である。必然的に自己再帰的となる。しかし同時に進行するグローバル化は、絶えず社会状況に変化をもたらし、潜在的には不確実性やアンチノミーを生じることもある。社会に安定状態の継続を期待することはもはやできない。この逆説的時代を、学者によりネーミングは異なるが、社会学では近代の第2ステージと捉える。このステージは、第1ステージ（=産業社会構築）の延長上にはあるものの、サービスという付加価値が高度化するにつれ、多様性がその特徴となってくる。したがって、同質性よりも異質性が優先し、この社会で継続的に恒常的に他者との調和あるいは大同小異を期待することはむずかしい。ケースバイケースで連合や協同が生じることになる。

本稿ではこのような認識から、前稿に引き続き第2ステージの事象について、早くからこの変化到来に着目した先駆者の論拠に注目し、そこに共通して見られる生活者としての社会適応力すなわち今後の社会への対応の仕方を考察したい。なぜならそこに、近未来への指針となる実践のヒント、突破（break through）の仕組みを見いだすことが可能であると考えられるからである。

2. Robert Jay Lifton の Proteus 的人間について

現代社会への適応型として Proteus 的人間を提唱したことで有名な R. J. Lifton (1926-) は、変革期の人間形成をテーマとする歴史主義的心理学者である。

この Proteus はギリシア神話の海神 Proteus から援用しており、「ギリシア神話によれば、プロテウスは、変幻自在で、恐ろしい大蛇、ライオン、竜、火、洪水などになることができる」⁽²⁾ し、「かなり容易に—野生のいのししからライオンへ、そして竜へ、火へ洪水へと—自らの形を変えることができる」⁽³⁾ とその特徴を記述している。姿だけでなくパーソナリティをも変幻自在に変えるところが Proteus 的人間の特徴である。このタイプは状況に応じて適合的な態度や行動パターンを瞬時に選択し実行することができる。

この、パースナリティに一貫性を欠き、一見するとご都合主義にもみえる Proteus 的人間は最近とみに増殖中で、「プロテウス型は若者の間でもっとも顕著であるが、年輩者の間にも根をおろし」⁽⁴⁾、「私の論点は、実際、プロテウス的人間がわれわれ全部の中に住みついているということである。われわれはみな現代社会に住んでいて、多かれ少なかれ、私が述べてきたもろもろの影響力にさらされている」⁽⁵⁾ と Lifton はいう。

ところで、このような一貫性を欠くパースナリティは、E. H. Erikson (1902-1994) によれば、identity の confusion (混乱) ないしは diffusion (拡散) と称されるタイプであった。これを Lifton は 180 度転換し、これまで病理現象に分類されていたこれらのタイプを、新しい時代の適応型として高く評価してみせた。「こうしたプロテウスのスタイルは、決してそれ自体が病理的なものではなく、実際のところわれわれの時代では生活に欠かせない機能的なパターンの一つなのかもしれない」⁽⁶⁾ と彼はいう。

ネガティブからポジティブへの評価の反転は Erikson と Lifton、二人の生活世界やそれを反映した理論構築のタイムラグに起因している。Lifton はこう述べる。「われわれは、ここで自己の不変性や永続性という考えをすてて、われわれの外的環境だけでなく、内面的な経験をも特徴づけている変化や流動性のもつ、より重要な要素を把握する必要があるのではないかと思う」⁽⁷⁾ と。Erikson が提唱した identity は不変性と継続性に価値を置き、近代の第 1 ステージに帰属するものであったが、Lifton が提唱した Proteus 的人間は近代の第 2 ステージ、すなわち、第 3 次産業以降が社会の中心となる時代に対応したパースナリティであった。まさに本来のパースナリティ、すなわち複数の仮面を内在することが想定されている。多分に統合失調症気味な現代社会に適合した心理パターンである。Erikson と Lifton 二人の相違は、このステージの相違に起因していたのであった。

日本の場合、1975 年前後から第 3 次産業中心のサービス化社会にシフトしたと考えられる。参考に産業別就業者の構成比(表 1)を見ると、第 3 次産業就業者が 50% を超えたのがまさにこの時代であった。この時代から生活様式の多様化が顕著になり、アメリカとのタイムラグを考慮しても、1975 年以降に、日本も第 2 ステージに突入したことが明白である。したがって、Lifton の理論が現実味を帯びて来た次第である。第 3 次産業以降のサービス化社会や情報化社会では、もの(モノ)離れを加速させる付加価値が重視され、次々に新たな付加価値を開発せざるを得なくなる。そこに浸透する多様化と個人化は、実は表裏一体で、不可分の関係にある。

また、D. Riesman (1909-2002) が提唱する同調パターン⁽⁸⁾のうち内部指向型人間を第 1 ステージに帰属するものとみると、他人指向型人間は第 2 ステージの嚆矢に位置し、Lifton が考える Proteus 的人間は多様性を付加した他人指向型人間ということが出来る。すなわち他人指向型をさらにグレードアップしたパースナリティと考えるとわかりやすい。ただし固定化した類型というよりも、時間軸に沿って次々と変身する流動的パースナリティと考えたほうがより適切と思われる。絶えざる性格形成がその特徴となるため、彼は社会過程を重視し、「私は、『自己・過程』という用語を使ってきたが、それは、流動や境界の流動性の観念をさらに明確にあらわそうとしたからである」⁽⁹⁾ と述べる。

ここで 3 人の関係を整理すると、Lifton は、Erikson を批判的に摂取し、Riesman を進化させ、この両者を止揚した人間像を構築したということが出来る。すなわち、産業社会から脱工業化社会・高度消費社会にシフトした時代に適合的なパースナリティを考察したのである。しかも新しい時代への適応パターンを受動的ではなく、構成的に追求していく主体的存在として捉え、こうした人々が新

表1 産業別就業者の推移（構成比）

| 産業（3部門） 年 | 第1次産業 | 第2次産業 | 第3次産業 |
|--------------|-------|-------|-------|
| 1950（S 25） | 49% | 22% | 30% |
| 1955（S 30） | 41% | 23% | 36% |
| 1960（S 35） | 33% | 29% | 38% |
| 1965（S 40） | 24% | 32% | 44% |
| 1970（S 45） | 19% | 34% | 47% |
| 1975（S 50） | 14% | 34% | 52% |
| 1980（S 55） | 11% | 34% | 55% |
| 1985（S 60） | 9% | 33% | 58% |
| 1990（H 2） | 7% | 34% | 59% |
| 1995（H 7） | 6% | 32% | 62% |
| 2000（H 12） | 5% | 30% | 65% |
| 2005（H 17） | 5% | 27% | 68% |

総務省統計局ホームページ（<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2010/kouhou/useful/u18.htm>）のデータを参考に作成

しい時代を担っていくと結論づけたのである。Liftonは次のようにまとめている。「私なりに新しい歴史を定義するなら、それは人間の（中略）文化形態の徹底的な再創造であり、多くの人々の参加によって行なわれる再創造である。これらの文化形態の新しさは、自然発生的に生まれてくるものではなく、既存の精神的・物質的構成要素の延長や変換によって、以前にはまったく知られていなかったか十分に知られていなかった組み合わせをつくるときに、生まれてくる。だから、新しい歴史とは、境界の延長であり、その再設定でもある」⁽¹⁰⁾と。彼の理論は変動期に適合的で、何より実践につながる行為主体の理論として評価できるのである。

3. Martin Trow の『高学歴社会の大学』について

人気コミック『あたしんち』に、主人公のあたし（高校生のみかん）と母親が大学進学について口論するシーンがある。主人公のタチバナ家は特別裕福でもないが、さりとて貧しくもない中流のサラリーマン家庭（4人の核家族）である。そして子どもの進学資金もそれなりに準備してある。しかし貴重な資金であるだけに大切に使ってほしいと思う。そこで母親は「お母さんが名前知らない大学行くぐらいなら就職しなさいよ」とか「成人式用にふりそで買う貯金があるからあれ（大学進学—筆者注）と交換にしてもいいよ…」と娘（あたし）をけん制する。あたしは内心「浪人する気でいたけどこりゃムリだ」と思う。そして、せめて親なら「フツ—たのむから大学いって来て言うよ！」と反論してはみるものの、母親に「ウチはいわない」と軽くあしらわれてしまうのである⁽¹¹⁾。

このエピソードには、親世代と子ども世代の大学についての認識のズレが見事に描写されている。禁欲的でハングリーな時代に教育を受けた親世代とモラトリアムが延長深化しのんびりと構える子ども世代、両者の対比が顕著であり、これは近代の第1ステージと第2ステージの相違に相当すると考えられる。現在高校では、よほど明確な目的あるいは特殊事情がない限り、「フツ—」ならば大学進学を前提とした進路指導をする。高卒での就職は年々厳しくなる状況にあり、高校側も保護者側も

「たのむから大学いってくれ」と考えている。このエピソードの潜在的軸は高等教育の大衆化である。そこで、大学・短大への進学率の推移（表2）を参照すると、作品掲載時（初出 1997年2月）の高等教育進学率は大学・短大を合わせて40% 台後半で、過半数に近い数値を示している。他方、親世代がベビーブーマーであれば、彼らの時代の進学率はまだ20%にも届かない。両者の相違は一目瞭然である。これは数値上の違いにとどまらず、質的相違も暗示している。それはまさに、エリート養成時代の高等教育とマス化が進行した時代の大衆高等教育である。

表2 大学・短大への進学率の推移（%）

| 年 | 進学先 | 大学 | 短大 | 合計 |
|-------------|-----|------|------|------|
| 1960 (S 35) | | 8.2 | 2.1 | 10.3 |
| 1965 (S 40) | | 12.8 | 4.1 | 16.9 |
| 1970 (S 45) | | 17.1 | 6.5 | 23.6 |
| 1975 (S 50) | | 27.2 | 11.2 | 38.4 |
| 1980 (S 55) | | 26.1 | 11.3 | 37.4 |
| 1985 (S 60) | | 26.5 | 11.1 | 37.6 |
| 1990 (H 2) | | 24.6 | 11.7 | 36.3 |
| 1995 (H 7) | | 32.1 | 13.1 | 45.2 |
| 2000 (H 12) | | 39.7 | 9.4 | 49.1 |
| 2005 (H 17) | | 44.2 | 7.3 | 51.5 |
| 2010 (H 22) | | 50.9 | 5.9 | 56.8 |

国民生活白書（平成19年版、内閣府編、2007）と日本国勢図会2011/12（第69版、矢野恒太記念会編、2011）を参考に作成

筆者はこのエピソードから、まず『あたしンち』の作者が現代の教育事情を熟知していることを認め、次いでM. Trow (1926-) が提示した「高等教育制度の発展段階」の3段階説⁽¹²⁾を想起した。すなわち、エリート型 → マス型 → ユニバーサル型 の発展図式である。母親の「名前知らない大学行くぐらいなら就職しなさい」はエリート型時代の発想を引きずる言説といえ、同じく母親の「100歩ゆずって!! 成人式用にふりそで買う貯金があるからあれと交換にしてもいいよ…」はまさにマス型時代に相当する言説と考えられる。そして、ほかの親は「フツータのむから大学いって来て言うよ!」はユニバーサル型時代の言説を予感させる。またこの段階では、現役高校生も卒業後1年程度の浪人生活を当然視している節がある。このように、豊かな社会の所産である進学率の上昇は、量的変化はもとより、質的変容ももたらした。この点について早期から指摘していたのが、Trowであった。彼の論点を確認してみよう。

大学に進学する人々の数がふえ、またさらに多くの人々が、大学に行くことは自分たちにとっても子どもたちにとっても、可能で理にかなった願望だと意識しだすにつれて、高等教育はますます全ての国民の生活水準の一部となっていく。息子や娘を大学にやることは、もはや高い地位と特別の能力をもった一握りの人々だけに約束された特権ではなく、誰にとっても、人並みの生活をする上で欠くことのできないものになる。つまり子どもを大学にやることは、自動車や洗濯機を手に入れるのと同じように、増大するゆたかさを象徴するものとなるのである⁽¹³⁾。

「フツータ」とは、ここに登場する「大学に行くことは、可能で理にかなった願望」あるいは「人並

みの生活」という文言と等価である。

ある年齢層の若者のうち大学に進学するものの数が年々増加すれば、それに伴って大学進学のもつ意味も変化していく。はじめは「特権」だった大学進学は「権利」となり、やがては現在のアメリカがそうであるように、一種の「義務」に近いものへと転化する。第三段階の教育機関に在学することの意味、ないしは意義のこうした変化は学生の進学動機だけでなく、かれらをむかえ入れる高等教育機関の知的雰囲気やカリキュラムにもはかり知れない影響を及ぼす⁽¹⁴⁾。

引用文にある「現在のアメリカ」(70年代)では進学率が50%に到達しているが⁽¹⁵⁾、このラインをユニバーサル型の入り口と考え、これを日本に置き換えてみると、2005年以降で完全にユニバーサル型に移行している。2010年では56%を超えている。こうしてみると、日本の高等教育は、既にマス型を20世紀で終了し、21世紀からはユニバーサル型に突入している。それを認識し今後の対応を急務とする必要からも彼の提言に注目したい。

万人に進学の機会を提供するユニバーサル型の高等教育機関になると関心ははじめて、多数の学生に高度産業社会で生きるのに必要な準備をあたえることにむけられる。高等教育機関は広い意味でも狭い意味でも、エリート養成を主要な目的とすることをやめて、全国民を教育の対象とするようになり、その関心はなによりも、社会と経済の急激な変化に特徴づけられた社会が要求する適応性を、十分にあたえる教育にむけられるようになる⁽¹⁶⁾。

それでは、「社会が要求する適応性」とはどのようなものであろうか。具体的に説明した箇所を引用する。

ユニバーサル高等教育の場合には、学生に新しい、より複雑なものの見方をはば広く身につけさせることが教育の中心となり、教師と学生の直接的な人間的つながりは従となる。またそこでは通信教育、ビデオ・カセットやTV、コンピュータなど、新しい教育工学的な教育形態が積極的に活用される⁽¹⁷⁾。

ユニバーサル段階に入ると、学問的水準をはかる尺度はこれまでとは違ったものになる。ある一定の水準が達成されたかどうかよりも、教育的経験を通じて、どれだけの「付加価値」が形成されたのかが問題になる⁽¹⁸⁾。

この立場は、現在の「社会人基礎力」(経済産業省)⁽¹⁹⁾や「夢を実現する7つの力」(昭和女子大学就業力育成支援事業)⁽²⁰⁾と通底し、21世紀の国際社会、多元的文化社会で生活する人々に必要不可欠な人間力の形成が目標とされる。ここでは、絶えざる自己革新が要請され、付加価値を追求するところに、多様性の時代、21世紀型の個性が存在すると考えられる。停滞は許されない。流動的(リキッド)といわれる近代の第2ステージは、自己を活かすも殺すも自己責任というリスクを抱え、厳しさを内包していることも忘れてはならない。

4. George Herbert Mead の emergence (創発性) について

時代は遡るが、多文化共生の方途を社会心理学的に模索したのがアメリカシカゴ学派の泰斗、G. H. Mead (1863-1931)であった。彼はアメリカの入移民や産業化に起因する国内の人口移動に伴う多

文化間の対立・衝突を直視し、その調停・調和を実践的に考察した行動主義的心理学者でもあった。

彼はそのために、反省的知能 (reflective intelligence) による反省作用 (reflection or reflexivity) を重視したが、これこそが、人間最大の特徴と考えたのである。

わたしが精神の特質としてしめたのは、人間の反省的知能であり、それは下等動物の知能と区別できる。(中略) われわれが反省的知能として指示しているものは、一般に、人間にだけ属するものとして認められる⁽²¹⁾。

そして、外界からの刺戟を無批判的に受容するのではなく、反省作用を経由し、心理的同調で外界に適応する場合と、心理的に異化し外界の再組織化を図る場合とを考えた。

共同体の態度をわれわれが採用するとしよう。そのこと自体は正しい選択だ。しかし、共同体にたいして [的確に] 応酬し、共同体の身振りを変化させることに固執するという [われわれの] もうひとつの能力をも、忘れてはいけない。われわれは、物事の秩序を改革できる。あくまでも頑張る、共同体の基準をより良い基準へ改良していくこともできる⁽²²⁾。

安定した伝統社会では同調が基本となるが、グローバル化社会、多文化社会では絶えざる異化が必要不可欠となる。換言すると、現状打破の break through は後者から発生するのである。

彼は、自我構造には2つの構成要素があると設定した。1つが他者と心理的同調でつながる “me” (客我) の部分。そしてもう1つが、me に対して異化作用を生ずる “I” (主我) の部分である。前者は自我の基礎的部分となり、generalized other (一般化された他者)、あるいは、社会の一般的態度や行動パターンを内面化した部分といえる。

「I」とは、他者の態度にたいする生物体の反応であり、「me」とは、他者の態度 (と生物体自身が想定しているもの) の組織化されたセットである。他者の態度が組織化された「me」を構成し、人はその「me」にたいして「I」として感応する⁽²³⁾。

われわれはこの me を、先ず学習あるいは内面化しないことには、その社会で生活することができない。社会に順応することから始まるのである。これは、自我に me を構築することにほかならない。あくまで me が自我の基本構造である。しかし、変革期あるいは流動的社会では、これまでの me に拘泥しすぎると結果的に不適応を引き起こす。そこで me に対して付加価値あるいはアレンジを施すことが必要となる。この異化作用がもたらす新しく付加された部分が I である。この I こそが、因習を打破し (break through)、次のステップへの自己表現となる。I には、創発性 (emergence)、創造性 (creativity) が内包されているのである。

組織化された態度の組にふくまれている社会状況へのこのような新しい応答が、「me」に対応するものとしての「I」を構成する。(中略) もちろん実際には、新奇なものがたえず出現していて、そういう認識は、もっと一般的な術語である創発という概念で表現されている。創発には再組織化がふくまれていて、再組織化すると今までなかった何かをもたらされる⁽²⁴⁾。

しかし、me のなかに I の契機があるので、単なる思いつきや自己満足、論理的根拠のないものは不適切である。あくまで社会にとって有益なもの、社会福祉につながるもの、すなわち創造的協同に

つながるものでなければならない。この時はじめて、自我は再構成され、グレードアップされた構造となる。結果的に止揚されたものとなる。Mead は「me と I との会話遂行」が主体性をなすと見たが、自我構造における me と I の連鎖、「me → I → me' → I' → …」の螺旋的位相は新時代の社会構築と対称をなすものである。どちらか一方を優先するというのではなく、どちらの更新も必要不可欠ということである。

精神なり理性なりは、社会的組織体と社会的組織体のなかでの協同的活動とを前提にしている。思考とは個人の推論、すなわちわたしの用語でいう「I」と「me」のあいだの会話の遂行、にすぎない⁽²⁵⁾。

筆者は、「me から I へ」の Mead 理論を 21 世紀のグローバル化時代において、今こそ再生し実践する絶好のタイミングと考えている。知識としての理論ではなく、まさに知恵として応用しなければならない。反省作用を経て I は知恵を獲得するが、まさにこの I をわれわれは実践的に引き継がなければならない。しかしまた、I の状態に拘泥し、甘んじていけない。me と I の連鎖を螺旋的にたかめていく必要があり、われわれにはその実践こそが急務となっている。多文化共生時代のモデルを構築した先駆者 Mead、彼の理論を検討した意味がここにある。

5. Zygmunt Bauman の “Liquid Life” について

ここまで近代の第 2 ステージあるいは多文化共生に関連した先駆的 3 人の学説を再確認したが、ここではよりアップデートした “Liquid Life” 論を展開している Zygmunt Bauman (1925-) の学説を追体験したい。

引用資料として、彼の著 “Liquid Life” Polity, 2005 を参照する。

近代の第 2 ステージ、それを彼は Liquid Modernity と称し、極めて消費が優先される社会とみる。ここでの生活者は、即時的満足や個人的幸福の追求を繰り返すことになる。第 1 ステージの根本原理である生産指向の長期的で全体的視点は後退し、個人化がいつそう進展する社会となる。

In short, the liquid modern consumer society degrades the ideals of the ‘long term’ and of ‘totality’. In a liquid modern setting that promotes and is sustained by consumer interests, neither of those ideals retains its past attraction, finds support in daily experience, is in tune with trained responses or chimes with acquired commonsense intuitions. Those ideals tend to be, accordingly, replaced with the values of instantaneous gratification and individual happiness⁽²⁶⁾.

近代の第 2 ステージ（流動的近代）では生産者の関心よりも消費者の関心が優遇されることになり、それ以前の社会で重要であった全体性や長期性の根本原理はそれほど評価されなくなり、魅力を放つこともなくなる。日常の経験においてもその支持基盤を喪失する。そして、それらに結びつく訓練もなければ、あたりまえのこととして身につくこともない。第 1 ステージの構成原理（価値）は後退し、それらと入れ替わりに眼前の満足や個人的幸福が第 2 ステージでは幅を利かすようになる。（以下、原文の下は筆者の意訳）

第 2 ステージでは、万事変化のスピードが速く先行きも不透明のため、全体像の把握は困難を極める。第 1 ステージの生産社会優先とは異なり、先を考えコツコツと努力を持続していくことよりも、

目先の新しさに関心をもつようになる。豊かな社会では辛く面倒なことよりも簡単で楽しいことが優先され、禁欲的なハングリー精神は敬遠される。比喩的に言うと、積分型から微分型へのシフトが生じる。彼はこの生産よりも消費を優先する状態を、“consumerist syndrome”（消費者優先症候群）と呼んでいる。わが国でも「転石に苔生ぜず」の解釈が、積分型のそれ、積み重ねを評価しコケを重視する見方から、微分型のそれ、変動的でコケのつかない転石を新鮮と評価する見方へのシフトが見られるが、この事情も同様の理由によると考えられる。

The ‘consumerist syndrome’ to which contemporary culture is increasingly surrendered centres on an emphatic denial of the virtue of procrastination, of the ‘delay of satisfaction’ precept – those foundational principles of the ‘society of producers’ or ‘productivist society’. In the inherited hierarchy of recognized values, the ‘consumerist syndrome’ has dethroned duration and elevated transience. It has put the value of novelty above that of lasting⁽²⁷⁾.

消費者優先症候群が現代文化を席卷するようになると、生産指向型社会の公理であった満足を後送りにし時間をかけることに重きを置くこれまでのやり方は拒絶されるようになる。もはや持続性は受け入れられず、これまでの価値体系の中ではその評価を下げる。これに代わって、一時性の評価がたかまる。つまり、第2ステージでは継続よりも真新しさが評価される価値の逆転が生ずる。

The ‘consumerist syndrome’ is all about speed, excess and waste⁽²⁸⁾.

彼はこのような消費者優先社会の特色は、「スピード・過剰・浪費にある」という。

そこで問題は、このような流動的社会にあって、人間はどのように対処したらよいかということになる。この場合、社会の側、マクロ側からの視点よりも、直接的には、生活者のミクロ側からの視点が参考となる。

彼は自己形成・パーソナリティ形成について、絶えざる自己啓発、自己革新を継続していくために、生涯にわたる教育が要求されていると述べている。

More to the point, in the liquid modern setting education and learning, to be of any use, must be continuous and indeed life-long. No other kind of education and/or learning is conceivable; the ‘formation’ of selves or personalities is unthinkable in any fashion other than that of an ongoing and perpetually unfinished re-formation⁽²⁹⁾.

要するに第2ステージでは、もし有益であるとするならば、教育と学習を生涯にわたって継続する必要がある。それ以外の教育や学習は想像できない。人格形成は、生涯にわたる終りなき改革の連続のなかでこそなされる。

第2ステージという流動的社会では、絶えざる創造的破壊、挑戦、自己研鑽が必要となる。これらを欠くと、時代遅れという不適応のスティグマやリスクを負うことになる。逆説的ながら、自己革新を継続できるか否かがポイントで、これが結果的に、二極化や格差が生じる要因にもなっている。豊

かな社会とていうものの、潜在的には自己責任のリスクに満ちている。流動的社会的の行きつく先はどのような社会なのか、現在のところ誰にもわからない。しかし、自己変革を継続する生活者にはいずれ見えてくるのであり、多分それは前代未聞のものとなろう。

We feel, guess, suspect what needs to be done. But we cannot know the shape and form it will eventually take. We can be pretty sure, though, that the shape will not be familiar. It will be different from everything we've got used to⁽³⁰⁾.

私たちは何かをしなければいけないことに気がついてはいる。しかし、それが究極的にはどのような形態をとるものか誰にもわからない。ただ言えることは、これまでのよく知られたもの、慣れ親しんだものとは異なるものだろうということである。

6. 近未来への指針

本稿で取りあげた先学4人の理論は、いずれも行為主体の自己変革性・創発性・積極性を重視する、社会変動期に適合した理論であった。限定された範囲内、あるいは安定した社会では有効な統一基準も、グローバル化社会や多文化社会では有効性を欠くことになる。相対的に比較検討し、あるいは両者を止揚し、新たな解を追究するというスタンスが変動期には必要となる。従来の方法に固執する旧弊遵守の姿勢からは何も生まれず、かえって停滞や衰退を招いてしまう。グローバルで流動的な社会こそ、斬新な発想、発想の転換が不可避となる。本稿ではこれを可能とする行為主体の内部構造を、Lifton, Trow, Mead, Bauman に確認したのであった。彼らに共通した行為主体の自我構造を一言で表現すると、ソフトな自我形成ということになる。彼らの理論は空論的なものではなく、それぞれの時代の現実社会の課題と格闘した結果であった。ここに、近未来の指針として検討した理由がある。21世紀の変動期に生きるわれわれは、生涯にわたり実践のなかで、ソフトな自我形成を継続しなければならない。換言するならば、近代の第2ステージはすべてにおいて、もっと²の時代であり、その中で絶えざる自己革新・主体的自己形成が要請されることになる。それは何も生活者に限ったことではなく、集団や組織にとっても同様なのである。

(註)

- (1) 西脇和彦「1970年代以降の日本社会—ポストモダン or 近代の第2ステージ—」『学苑』No. 829, 昭和女子大学, 2009. 11, pp. 87-95
- (2) R. J. Lifton “Boundaries—Psychological Man in Revolution” 1967, 外林大作訳『誰が生き残るか—プロテウスの人間—』誠信書房, 1971, p. 56
- (3) R. J. Lifton “History and Human Survival” 1970, 小野泰博・吉松和哉訳『終りなき現代史の課題—死と不死のシンボル体験—』誠信書房, 1974, p. 314
- (4) R. J. Lifton & E. Olson, “Living and Dying” 1974, 中山善之訳『生きること死ぬこと』金沢文庫, 1975, p. 167
- (5) (2) 邦訳, p. 83
- (6) 同書, 邦訳, p. 57
- (7) 同書, 邦訳, p. 47
- (8) D. Riesman “The Lonely Crowd: A Study of the Changing American Character” 1950, 加藤秀俊

訳『孤独な群衆』みすず書房, 2006

- (9) (2) 邦訳, pp. 48-49
- (10) 同書, 邦訳, p. 125
- (11) けらえいこ『あたしんち④』メディアファクトリー, 2001, pp. 120-122, なお初出は読売新聞 1997. 2. 23 日曜版
- (12) M. Trow 'The Expansion and Transformation of Higher Education' 1971, 'Problems in the Transition from Elite to Mass Higher Education' 1973, 天野郁夫・喜多村和之訳『高学歴社会の大学—エリートからマスヘ—』東京大学出版会, 1983
- (13) 同書, 邦訳, pp. 100-101
- (14) 同書, 邦訳, p. 61
- (15) M. Trow "From Mass to Universal Higher Education" 2000, 喜多村和之編訳『高度情報社会の大学』玉川大学出版部, 2000
- (16) (12), 邦訳, p. 65
- (17) 同書, 邦訳, p. 67
- (18) 同書, 邦訳, p. 74
- (19) 社会人基礎力とは, 「前に踏み出す力」, 「考え抜く力」, 「チームで働く力」の3つの能力(12の能力要素)から構成されており, 「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として, 経済産業省が2006年から提唱しているもの。3つの能力, 12の能力要素は以下の通りである。
- 前に踏み出す力(アクション)~一步前に踏み出し, 失敗しても粘り強く取り組む力~
- 主体性・働きかけ力・実行力
- 考え抜く力(シンキング)~疑問を持ち, 考え抜く力~
- 課題発見力・計画力・創造力
- チームで働く力(チームワーク)~多様な人々とともに, 目標に向けて協力する力~
- 発信力・傾聴力・柔軟性・状況把握力・規律性・ストレスコントロール力
- <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.htm>
- (20) 坂東眞理子『夢を実現する7つの力』KKロングセラーズ, 2011/「夢を実現する7つの力」昭和女子大学英訳すると Dreams Come True with "Seven Seeds" となり, seven seeds には, グローバルに生きる力・外国語を使いこなす力・ITを使いこなす力・コミュニケーションを取る力・問題を発見し目標を設定する力・一步踏み出して行動する力・自分を大切にする力が相当する。いずれも21世紀の生活者として必要不可欠な資質であり, グローバル人財に収れんする。
- (21) George Herbert Mead "Mind, Self, and Society; from the Standpoint of a Social Behaviorist" 1934, 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳『精神・自我・社会』青木書店, 1973, p. 127
- (22) 同書, 邦訳 p. 180
- (23) 同書, 邦訳 p. 187
- (24) 同書, 邦訳 p. 211
- (25) 同書, 邦訳 p. 347
- (26) Zygmunt Bauman "Liquid Life" Polity, 2005, p. 46
- (27) ibid, p. 62
- (28) ibid, p. 84
- (29) ibid, p. 118
- (30) ibid, p. 153

(にしわき かずひこ 文化創造学科)